特集
アジア地域研究と雑誌
―『コア・ジャーナル』を語る―

バングラデシュ人の考える教育学
―私にとってのコア・ジャーナル

日下部達哉

多くの地域研究者は、政治学や経済学など、自分のディシプリンにも関わりつつ、地域研究に関わっている。そして、ディシプリンと対象地域双方への興味関心が交差する部分でジャーナルが発刊されているなら、それはほぼ、自分のストレートな関心を共有する研究者たちが、議論を展開してくれているのだから、その研究者にとっては幸福なことであるに違いない。私は、比較教育学という専門に属しつつ、バングラデシュないし南アジア地域を事例研究として調査している。このディシプリンについての関心は、『比較教育学研究』という日本比較教育学会が出している年二回発刊のジャーナルが満たしてくれている。しかしこの中で南アジアを対象とする論文にはめったにお目にかかれない。また一方、バングラデシュの地域への関心は、不定期に発刊されている『遡河』という雑誌が満たしてくれている。研究者や仕事などでバングラデシュに深くかかわっている人々が、寄稿して深い情報を届けてくれる。こうした雑誌の存在が、私の研究生活を豊かなものにしてくれているのはいうまでもない。しかし残念ながら、日本あるいは欧米でバングラデシュの教育研究という、自分の関心に、ストレートに当てはまるようなジャーナルは存在しない。

では、論文を書く場合、どうやって情報を集めるかというと、経済学や政治学など、他分野でよく参照されている「花形ジャーナル」において、教育の話題が取り上げられると、それを取り寄せる。この手法をとることで最新の情報は追いかけられる。また情報収集という点でいえば、二〇〇〇年以降、バングラデシュの情報は、ネット上にあげられたものや、日本に居ながらにして入手できる資料も増加してきている。現在、ネットの検索エンジンで関連文献を探すと、主に、バングラデシュの教育省や国際機関による開発プロジェクトなどのサイトが現れる。こうして文献を集めることも可能である。しかし、ネットの検索では「世界に公開する必要があっておもに英語で公表された情報」については、おびただしい量がヒットするものの、「バングラデシュの研究者たちがいかに教育を議論しているか」などといった、自分本位の情報は、そうそう転がっていないものである。私は、そのあたりの情報をもたらしてくれるジャーナルはないかと探した経験がある。本稿では、前半で、自分にとってのコア・ジャーナルに出会うまで、を述べたのち、後半では、そのコア・ジャーナルをいかに活用しているかに触れたい。

●コア・ジャーナルにたどりつくまで

私がバングラデシュの教育について研究を始めたのが大学院生であった一九九九年である。院生時代から一貫したテーマは、一九九〇年以降、バングラデシュにおいて拡充された学校教育制度を、バングラデシュ農村の人々はいかに受容したか、というもので、「政府や国際機関が教育制度を拡充した」という普及の視点のみならず「人々が拡充された教育制度をライフコースにいかに組み入れたか」という、受容の視点も確保して研究を進めてきた。調査の基本は、多くの地域研究者同様、フィールドから得られる知見を重視する経験的実証型であったが、むろん、多くの資料にも頼った。収集の際は、あまり得意ではないダッカ市内を、ベビータクシーの排気ガスを浴びながら走り回ったが、統計については、当時は紙媒体で、教育関係の統計を扱っているBANBEIS（バングラデシュ教育情報統計局）を訪問したり、ニュー

マーケットというところにある書店で入手したりしていた。（現在はネット上で、かなりの程度まで入手可能になっている）。

また定期購読できるものについては、日本で購読できる、日本南アジア学会編『南アジア研究』"Journal of the Japanese Association for South Asian Studies""International Journal of South Asian Studies"や、先述の日本比較教育学会編『比較教育学研究』がある。しかし、日本南アジア学会のジャーナルの中で、教育について研究対象となった論文が掲載されたのは、研究ノートも含めると、Sasaki［2004］、Minamide［2005］、南出［二〇〇八］、の三本である。また、九〇年代から二〇一一年までに、日本比較教育学会の学会誌である『比較教育学研究』に収録された南アジア教育の関連論文は一一本、「特集」における論文は二本である（ただし、一国研究か、比較対象に南アジア地域を明示的に含む研究以外は除く）。数の問題では決してないが、一九八〇～九〇年代の南アジアにおいて多種多様な教育的営みが存在していたことを考えれば、南アジア教育研究は、前記個別のモノグラフを除いて長期間、空白地帯であったといわざるを得ない。また、上記のジャーナルには、上田［一九九〇］による歴史の中の日印関係および弘中［一九九五］による日印英関係における教育借用の研究、北村［二〇〇〇］による東パキスタンにおけるバナキュラーエリート台頭の背景を描いた研究、さらには九〇年代半ばから数年おきに登場する、南アジア各地域の教育事象を、フィールドワークによって解き明かそうとした武井［一九九五］、畠［二〇〇二、二〇〇六］、日下部［二〇〇三］などの諸研究、また中には川野辺［一九九二］による、イギリスにおけるバングラデシュ系移民の教育に関する論文も掲載されている。また、ここでは詳細を述べないが、イギリスの比較教育学のジャーナル"Compare"においても、一九七五年から二〇一二年までで三十四本の南アジア関連論文が発表されている。これらの中には、私が必要とした教育の質改善、機会の平等、試験の公平性、量的拡大の諸相の解説など、重要なトピックが多く含まれていることは確かだったものの、自分の関心の中心に位置づくであろうコア・ジャーナルとしてはあまり考えたことはなかった。また、最も問題なのは、既存資料だけでは「バングラデシュ人研究者の間で教育がどう議論されているのか、何が大事なことと考えられているのか」という肝心なことがわからなかったことである。

バングラデシュ人の教育学研究者が、自国の教育について語った論文や著作はネット上ではあまり見かけなかった。そうして集めた資料を使って作成した自分の論文は、核となる一次データについては、バングラデシュ人の生の声を反映しているものの、バングラデシュ人研究者が不在のバングラデシュ教育論を語りがちであった。教育という、「価値」を研究の対象とする比較教育学において、「バングラデシュの教育研究者が教育について何を考えているか」を捉えることは私にとってとても大事なことであった。そこで、そのことを知るため、大学院生のころバングラデシュの教育研究機関を訪ねて歩いた経験がある。

●コア・ジャーナルとの対話

バングラデシュの場合、教育事業を取り扱うNGO（CAMPE、BRAC等）やグラミンバンクが、ドナーへの報告のため、教育事業に関する報告書をだしているが、公的機関である国立教育政策研究所（National Academy for Educational Management：NAEM）や、ダッカ大学教育研究所（Institute of Education & Research, University of Dhaka：IER）も多くの教育学関連出版物を発刊している。私はできる限り訪問し、図書館や資料室を渉猟させてもらった。

そうやってさまよい続けているうちにダッカ大学のIERで、比較的、研究者独自の関心に基づいて書かれる傾向が高い、IERが発刊する"Teacher's World"というジャーナルに出会った。私にとってのコア・ジャーナルはこれだと思い、それ以降、バングラデシュ人研究者が教育にどう関心を持っているか知りたいとき、これらの論文を読むことにしている。私が保有するのは"Teacher's World"の一九八八年発刊の第四巻からであるが、二〇〇四年あたりから、仲良くなったIERの先生に送ってもらい、このジャーナルの論文を活用してきた。このジャーナルに寄稿するのは、発刊元であるダッ

カ大学ＩＥＲの教員がほとんどであるが、バングラデシュの大学で教育学をまともに研究しているのもダッカ大学だけなので、本ジャーナルをおさえることは、バングラデシュの教育学研究の要点をおさえたことにもなるといえる。

対象とするテーマ性は非常に広く、ＩＥＲ自体の役割を議論するもの、教育行政論や学校経営論、カリキュラム論、そして私がみて興味深かった、イギリスやインドや日本などの教育視察の成果を論文にした比較教育学的研究も掲載されている。さらに、私を喜ばせたのは、自分の専門にかなり近い、農村部における教育を論じた教育社会学的研究や、地方における教育のありかたを論じた教育制度学など、教室や学校の外のこと、つまり、社会と教育のつながりについての論文が割と掲載されていたことである。また、ＮＧＯの研究なども掲載されていたが、とあるＮＧＯが発刊する、内容の全てが成功例の報告書とは異なり、批判的検討も行われていたことにも好感をもった。

また、おもに農村住民へのインタビューを通じて研究を行ってきた私は、ネットでも手に入る単純な制度の説明では、納得がいっていなかった。表面をなぞったような制度の説明は、日本語でも入手可能であったが、自らの農村での経験と、教育行政の実態とをすり合わせながら、頭の中でバングラデシュに展開する教育体系とそれにまつわる人々に関する立体像を構成していく必要があった。先行研究として農村住民へのインタビューデータなどは、むしろＮＧＯの報告書などで報告されていたが、教育行政や教育社会学的な情報は、“Teacher's World”のほうに豊富に掲載されていた。たとえば、五一一名の農村部小学校教員のプロフィールを詳細に調べたSiddiqur［1989］の研究や、各タナ（郡）におかれた郡教育事務官の役割を調査したRoushan［1982］の研究などは、村の教育を見てきた自分にとっては非常に首肯できる内容で、重要な先行研究となった。またそれらは、綿密な調査に基づいたきわめて詳細な情報をつたえてくれた。

また、バングラデシュを含む多くの発展途上国では、タイのジョムティエンで「万人のための教育世界宣言」が採択された一九九一年以降、教育開発に関して追い風が吹いた。これにより、世界的に初等・基礎教育開発関連論文は増加する。私の研究もその中の一つであるが、バングラデシュはそうした論文の中で数多く登場することとなる。しかし、そのような論文の中で「バングラデシュ人の中でいかに教育が議論されているのか」着目した研究はあまりみかけなかった。そうして書かれた論文に少しばかり違和感を覚えていたのも事実である。

この“Teacher's World”では、一九九一年以降、教育開発関連の論文が出始めてはいるものの、教育政策の側面で、研究や出版がかなり盛り上がりをみせたほどには、取り扱われなかったといってよい。むしろ農村部の教師の特性や教育行政のありかた、小学校のドロップアウトの量的分析など、ミッション・オリエンテッドなものではなく、研究者の関心に基づいたアカデミック・ドリヴンな姿勢が貫かれていた。二〇〇五年あたりからは、女子教育や障がい者教育など、福祉の観点からの教育が多く取り扱われるようになった。女子教育については、Kamurunmnesa［1993］による女性の識字の状況を分析した研究や、実際にインタビューを行って女性の教育アクセスとドロップアウト問題を調査したMubina［2002］の論文など女性研究者の手による論文がさかんに登場してきている。また、年代を経るごとに、掲載される論文の質は向上し、単に叙述だけではなく、より分析的な論文が掲載されるようになっていった。

こういった姿勢には共感を覚えつつ、また自分の研究におおいに役立たせてもらったのだが、なぜ未だ登場しないのか、というトピックもある。それは、マドラサ（イスラーム神学校）の研究である。イスラーム国家であるバングラデシュの教育制度には、マドラサが、公的教育制度として組み込まれている。しかし、手元にある“Teacher's World”の全てを見ても、マドラサについて言及されたトピックはない。バングラデシュの教育開発でＮＧＯが活躍したのは非常に有名だが、まったく同じように宗教セクターも、この国の教育開発に貢献している。何本かの論文が掲載されていてしかるべきではないだろうか。また、これは不思議に思うのだが、執筆者た

ちは、バングラデシュに住んでいるのにもかかわらず、いくつかの研究を除き、あまり現地調査を行っていない。そこらへんは推して知るべしだが、ぜひ、億劫がらずにフィールドに出かけてほしいものである。

とはいえ、論文を書く前には必ず目を通すような「自分にとってのコア・ジャーナル」に出会った私は、とても幸せだ。最近になって、大学院生を教える立場になったが、バングラデシュの教育を専攻する院生たちには、ひととおりこのジャーナルに目を通すよう指示もしている。これからバングラデシュの経済は発展し、その余波は教育にも及んでくるに違いない。この"Teacher's World"の論文の内容はそのときどう変わっていくのか、あてのない予想をするのも今、楽しみの一つである。

（くさかべ　たつや／広島大学教育開発国際協力研究センター准教授）

《参考文献》

①上田学［一九九〇］「教育制度をめぐる日印英の相互関係―シャープの報告書を中心に」（『日本比較教育学会紀要』第一六号　一〇三―一一二ページ所収）。
②川野辺創［一九九二］「イギリスにおけるバングラデシュ系の生徒の低学力問題」（『比較教育学研究』第一八号　六五―七八ページ）。
③北村友人［二〇〇〇］「東パキスタン時代におけるバングラデシュの政治的エリート―バナキュラーエリート台頭の背景と構造」（『比較教育学研究』第二六号　二〇七―二二五ページ所収）。
④日下部達哉［二〇〇三］「バングラデシュにおける初等教育受容の研究―イスラーム宗教学校マドラサとの関係を軸に―」（『比較教育学研究』第二九号　一六九―一八五ページ所収）。
⑤武井敦史［一九九五］「インド・アンドラプラデーシュ州における初等教育計画に関する一考察―初等教育援助のあり方をめぐって」（『比較教育学研究』第二一号　一二一―一三二ページ所収）。
⑥畠博之［二〇〇二］「ネパールにおけるカースト／エスニック・グループ間の教育格差―格差の実態とその要因を探る」（『比較教育学研究』第二八号　一七九―一九六ページ）。
⑦畠博之［二〇〇六］「ネパール・タライ地方の被抑圧者集団の教育問題―教育格差の実態と学習阻害・促進要因を探る」（『比較教育学研究』第三二号　四六―六六ページ）。
⑧弘中和彦［一九九五］「国際教育交流研究の手法―日印関係を視軸に」（『比較教育学研究』第二一号　二三―三〇ページ所収）。
⑨南出和余［二〇〇八］「『ブジナイ』にみる子ども域―バングラデシュ農村社会における子どもの日常―」（『南アジア研究』第二〇号　五三―七六ページ）。
⑩Sasaki H. [2004] School choice and divided primary education: Case study of Varanasi, UP state, India. *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, No.16, pp.17-39.
⑪Kamurunnesa Begum [1993] Situation of Female Literacy in Bagladesh, *Teacher's World* 16 (1 & 2), pp.67-72.
⑫Minamide K. [2005] Children going to schools: School choice in a Bangladeshi village, *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies*, No.17, pp.174-200.
⑬Roushan Ara Chowdhury [1982] Role of the Assistant Thana Education Officers in the Administration of Primary Education in Bangladesh, *Teacher's World* 13 (7), pp.59-68.
⑭Mubina Khondkar [2002] An Empirical Assessment of Women's Limited Access to Education and Higher Rate of Drop out, *Teacher's World* 24-25, pp.127-134.
⑮Siddiqur Rahman [1989] A Profile of Primary School Teachers, *Teacher's World* 13 (7), pp.1-8.